

田部家本屋敷跡発掘調査現地説明会資料

雲南市教育委員会

田部家は、松江藩屈指の鉄師でした。たたら経営者を束ねる鉄師頭取をつとめ、菅谷鉦をはじめとして、多くの鉦・大鍛冶場を経営したことで知られています。現在の本宅前に建つ20棟もの土蔵は、たたら製鉄で蓄えられた富を象徴するものといえます。

吉田町は、明暦3年（1657）には町屋敷が67筆あり、この頃には町並みの原型ができていたようです。嘉永2年（1849）の段階には、田部家本屋敷は長さ71m・幅64mもある広大なものになっています。

しかしながら、本屋敷は慶応元年（1865）の火災によって焼失し、その後再建されることはありませんでした。



T2で確認された石垣

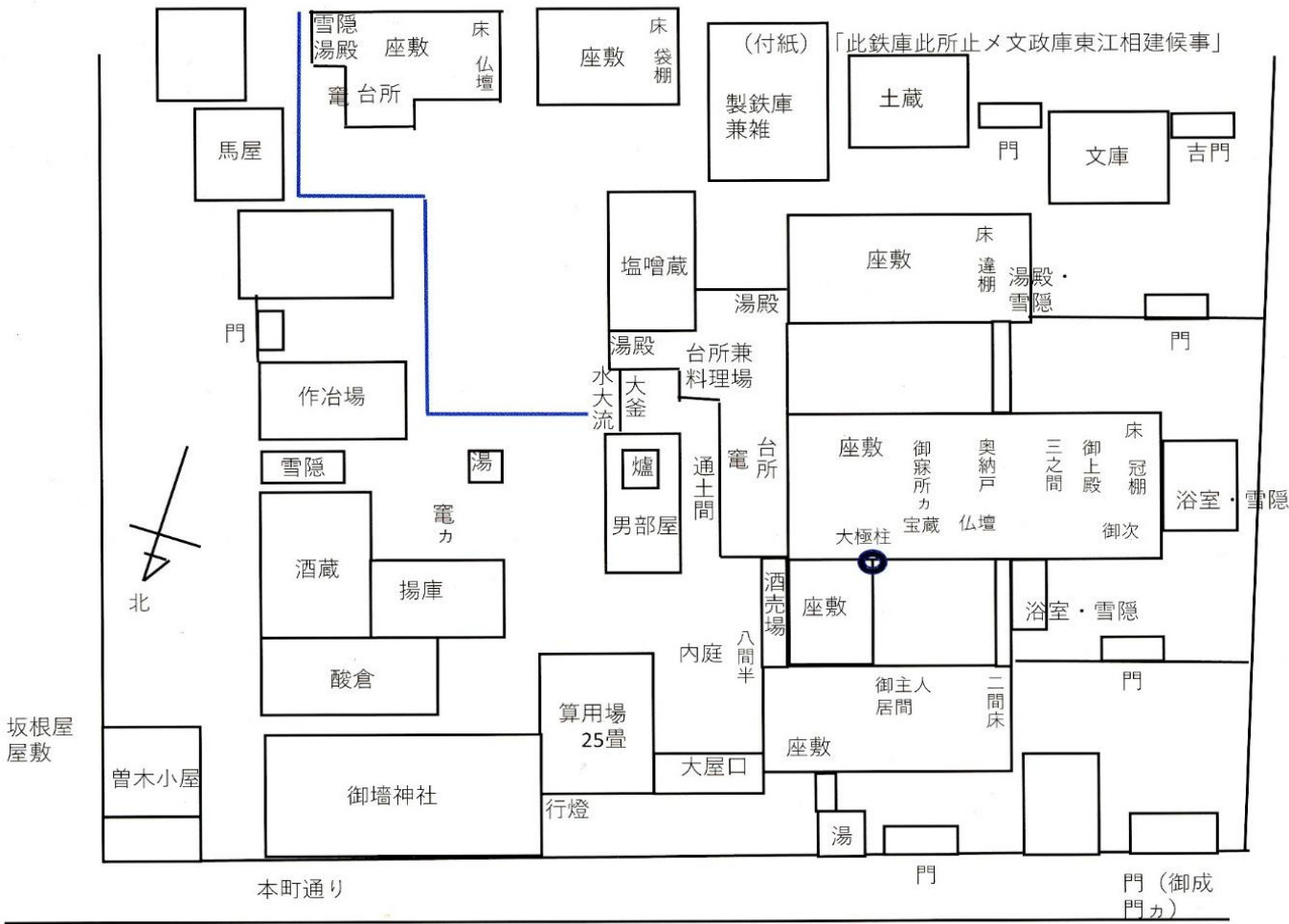
3. 建物跡

現在残る土蔵の北側に設けたT5では、建物跡が確認されました。丁寧に加工された切石を壁の基礎に使うもので、内部や外周にはマサ土が敷かれています。切石から少し間隔を置く位置には列石もあり、先行する施設が存在する可能性も考えられます。建物の規模は、調査範囲内ではわかりませんが、土蔵よりは一回り大きいことが想定されます。

「田部家本屋敷絵図面」には、土蔵もこの建物も描かれていませんので、絵図の作成以後に建てられたのでしょうか。



T5で確認された建物跡



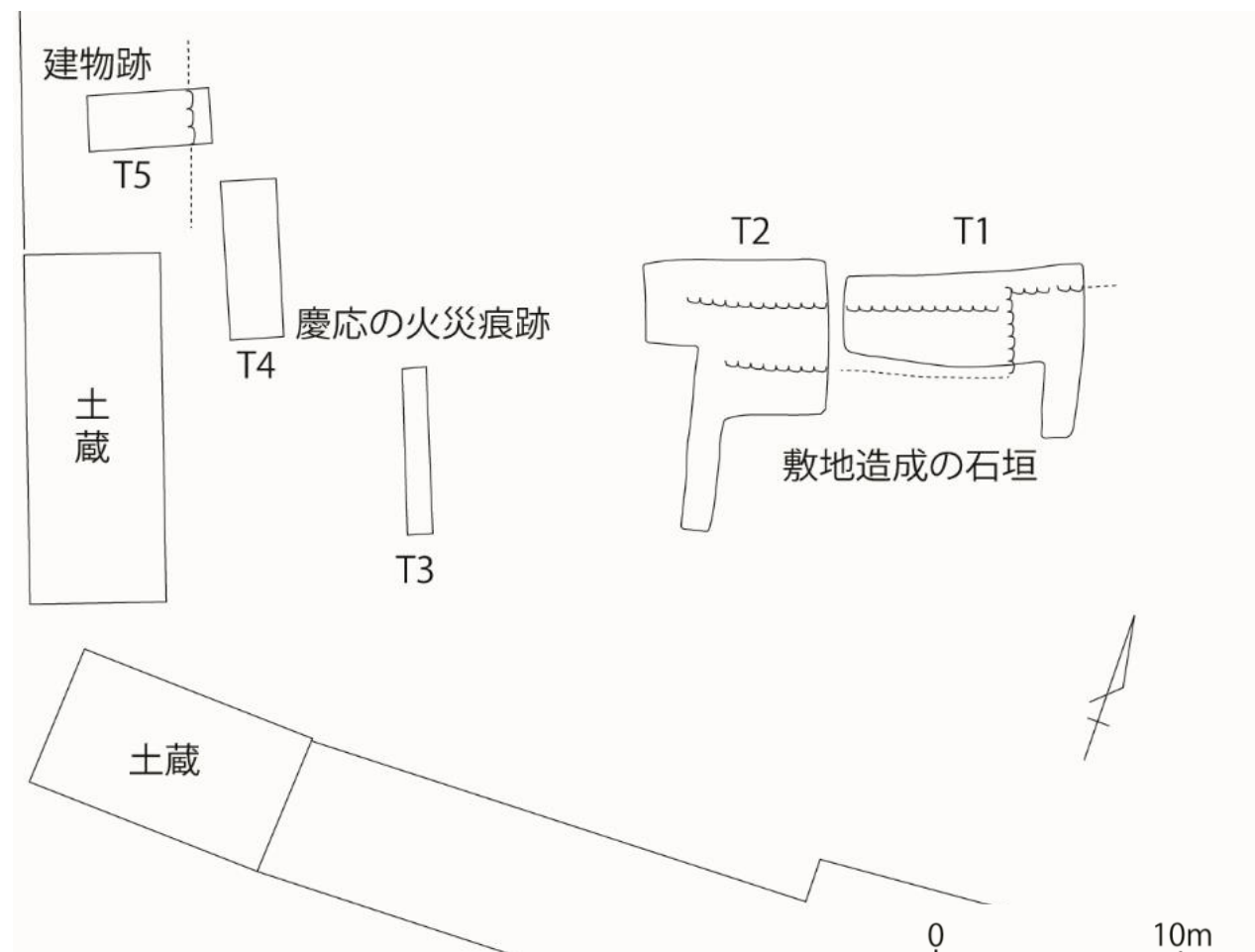
田部家本屋敷見取り図（「田部家本屋敷絵図面」より）

1. 田部家本屋敷

「田部家本屋敷絵図面」によれば、本屋敷に入ると田部家当主が執務する「御主人居間」があります。その奥には座敷と廊下で繋がる最も広い座敷があり、「御上殿」・「冠棚」と記されていますので、松江藩主や役人が視察に訪れた時に宿泊や休憩に利用したところだったようです。藩主らが屋敷に入る際には、本町通りに面した御成門を利用しました。

座敷の東側は、台所兼料理場となっており、「塩噌蔵」もありました。屋敷地の周りには「製鉄庫」・「土蔵」・「文庫」・「酒蔵」・「作冶場」・「馬屋」などが建ち並んでいました。

発掘調査は、「田部家本屋敷絵図面」にある建物の基礎が残っているのかどうか確認するために行いました。調査の結果、敷地の中心部であるT1・T2付近は後世の改変を受けていたことがわかり、残念ながら座敷などの建物は明らかにできませんでした。なお、敷地の周辺部にあたるT3・T4では、慶応年間の火災に伴う焼けた地面などが確認されています。



調査区と確認された石垣・建物跡の位置

2. 屋敷地の造成

田部家本屋敷跡は、現在、約千四百坪もの平坦地となっています。しかし、その姿は屋敷地の造成当初からのものではなかったようです。

後世に改変を受けた面を掘り下げると、T1・T2では新・古2段階の石垣が確認できました。古段階の石垣は、T1からT2にかけて12mほどの長さがあり、地形が高い西に向かって低くなります。その前2mのところには、新段階の石垣があります。両者の間は砂で埋められており、鉄穴流しの技術を利用して砂を流し込む方法で敷地が拡張されたようです。

新段階の石垣は、T2からT1へと延び、T1では「L」字形に屈曲しています。石垣は、高さが1.5m以上あり、前面がそろそろようにきれいに積まれています。造成によって埋没する以前には、石垣の前に建物などの施設があった可能性も考えられます。

T2では、石垣の前面が砂と多量の鉄滓（大鍛冶滓）によって、埋められていました。轆の羽口も出土していることから、本屋敷の敷地内で、たたらで生産された銑鉄から延べ板状になった地金を作る大鍛冶が行われていたことが想定できます。

また、田部家は古記録によれば17世紀後半から吉田町で屋敷地を購入していますが、この頃のものとみられる陶磁器も出土しています。



T1で確認された石垣